

2024年度HoBEAセミナー

北海道内の戦争遺構

～道東の太平洋岸に残るトーチカを中心に～



大樹町旭浜 トーチカ

北海道にも太平洋戦争時の遺構が各地に残っており、北海道の歴史の1ページを伝える存在といえます。今回は、道東地方のトーチカについて調査研究されてきました、小野寺一彦氏から話をさせていただきます。

※添付した北海道新聞の記事でも紹介されています。



神威岬 電磁台

- **日時**：2024年6月20日(木) 16：00～17：30
- **開催形式**：オンライン（Zoom）参加者へは前日までにURLをお送りします。
- **講師**：小野寺一彦（北海道建築技術協会会員、(有)設計工房アーバンハウス）
西川 忠（北海道建築技術協会常任理事、札幌市立大学 デザイン学部 教授）
- **申込期限**：6月17日（月）
- **定員**：なし
- **参加費**：無料
- **申込方法**：下記のURLまたはQRコードからお申し込みください
URL: <https://www.secure-cloud.jp/sf/business/1716961236fTHjUDHY>
QRコード：



お問い合わせ先
一般社団法人北海道建築技術協会 吉野、秋田
TEL：011-251-2794
Email：info_hobea@hobea.or.jp

【帯広】太平洋戦争末期、米軍上陸に備えて旧日本軍が道内太平洋沿岸を中心に造った箱形のコンクリート製トーチカ(防御陣地)について、帯広市の建築家小野寺一彦さん(64)が自身で調査した全95基の報告書を自費出版した。道内のトーチカを網羅した資料は珍しく、著者が30年近くかけてまとめた労作だ。貴重な戦争遺跡だが、海岸の浸食などで崩落や解体が相次いでおり、小野寺さんは「今記録しなければ忘れられてしまう」と話す。(高橋澄恵)

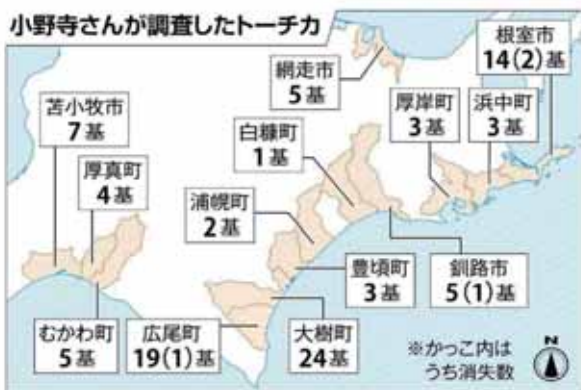
約30年で95基

報告書は「北海道のトーチカ〜太平洋戦争末期に築造されたコンクリート製防御陣地〜」。A4判128頁。道内4市9町の計95基を掲載した。いずれも1944年(昭和19年)から45年に造られ、一般的なものが高さ3・5メートル、幅5メートル、奥行き7メートルほど。異なる角度から撮影した4枚の写真を重ね、場所や調査日を明記。地域ごとの分布地図には、兵士が銃撃するために開けた「銃眼」の方向を矢印で示した。「米軍上陸が想定される河口付近に狙いを定めているのが分かる」と小野寺さんは解説する。

掲載したトーチカの約半数が十勝管内大樹、広尾両町に集中する。44年に旭川から移った帯広の旧陸軍第7師団司令部や同管内更別村の飛行場を守るためとみられ、「絶対に米軍を阻止する」という旧日本軍の意思を感じる」という。小野寺さんが調査を本格的に始めたのは96年ごろ。元々、日本建築学会会員として歴史的建造物を調査しており、戦争遺跡の保護が進む欧州の事例を知って関

道内のトーチカ 1冊に

帯広の小野寺さん



地上戦の可能性 後世に

心を持った。「道内も戦争の時代があったと伝える『歴史の証人』なのに、誰もまとめていない」と疑問を持ち、公的な記録がない中、元軍人が記した防衛作戦の記録を古書店で探すなどし、ありそうな場所を予

崩落や解体も

報告書を作るため、2019年7月から今年3月まで改めて全てを訪問。住民

や郷土史家の協力を得ながら新たに10基を発見した。大樹町出身の小野寺さんにとって、トーチカは「子供の頃の遊び場」。実戦で一度も使われることなく終戦を迎え、戦後は物置などとして使われていた。長い年月が過ぎ、今回掲載したもののうち4基は崩落や解体ですでない。小野寺さんは地上戦が道内でも想定された事実を後世に伝える戦争遺跡であることを訴え「北海道遺産などとして保存してほしい」と話す。

戦後 77年

トーチカ ロシア語で「点」を意味する小型の防衛用陣地。太平洋戦争末期、旧日本軍は米軍の上陸を迎え撃つためコンクリートなどを固めて各地に造った。内部に軽機関銃などを備え、銃眼と呼ばれる小さな穴から敵を狙う。道内の太平洋沿岸に多い。

報告書は90部を印刷し関係市町村の図書館などに配った。希望が多ければ増刷も検討する。1冊3500円。

問い合わせは小野寺さんが経営する設計工房アーバンハウス(帯広)、電話0155・233・7011へ。関連情報も求めている。



自身が調査したトーチカ全95基を載せた報告書を自費出版した小野寺一彦さん (加藤哲朗撮影)